

御門徒さんの法事に参った時に、そのお勤めのあとで、「亡くなった父も喜んでいることと思います」「ずっと気になっていたのですが、これで気が安らぎました」などと言われることがあります。どうやら追善供養のためにご法事されていたようです。あるいは義務的に考えているようにも聞こえてきます。

『歎異抄』第五条に「親鸞は父母の孝養のためとて、一返にても念仏もうしたること、いまだそうらわず」とあります。親鸞聖人は、追善供養のために念仏したことはないと言っているのです。

では、浄土真宗におけるご法事にはどういう意味があるのでしょうか。ご法事のお勤めの最初に表白(ひょうびやく)を読みます。表白には、このご法事はどのような意味で勤めるのかが含まれています。私がよく用いる表白の中に次のような一節があります。

「その遺徳は今もなお 私どものうえに はたらき続けてこのような法縁が与えられました はるかに故人の遺徳を偲んで 聴聞に精進し お念仏を相続して やがては 安養の浄土に生まれさせて頂いて ともに 相まみえることができますこと」

ご法事をつとめるのは、亡き人の命日をご縁とし、亡き人を偲びながら、阿弥陀仏のみ教えに遇うためのご縁なのです。阿弥陀仏のみ教えに遇って聞法することです。ご法事のお勤めにあうことは、まさに法を聞くということです。亡き人がその人の生き様を通して私に何を伝えようとしていたか、それを私ははたして受け取っているかを確かめるご縁が私に与えられること、それがご法事に遇うということの意味なのです。

私たちは、亡き人から仏の教えを、身をもつて教えていただいているのです。そのことに私たちが気づいたとき、亡くなった人は仏様といただけます。そして私たちの往くところは阿弥陀仏の浄土です。けして六道輪廻する迷いの世ではありません。亡くなった人を仏様といただくか、亡者とするかは、ひとえに私にかかっているのです。追善供養ではなく、南無阿弥陀仏のみ教えに遇い、お念仏申させて頂くことなのです。担当は真福寺住職でした。

